

坂口安吾

青春論



青
春
論

一 わが青春

今が自分の青春だというように、僕を僕のまま、たく自覚した覚えがなくて、過ぎしてしまつた。いつの時が僕の青春であつたか。どこにも区切りが見当たらぬ。老成せざる者の愚行が青春のしるしだと言ふならば、僕は今もなお青春、おそらく七十になつても青春ではないかと思ひ、こういふ内省というものは決して気持ちのいいもの

ではない。気負って言えば、文学の精神は永遠に青春であるべきものだ、と力みかえってみたくなるが、文学と念仏のように唸うなったところで我が身の愚かさが帳消しになるものでもない。生まれて三十七年、のんびんだらりとどこにも区切りが見当たらぬとは、ひどく悲しい。生まれて七十年、どこにも区切りが見当たらぬ、となつては、これはまた助からぬ気持ちであろう。ひとつ区切りをつけてやろうか。僕は時にこう考える。さて、そこで、しからば「いかにして」ということになるのであるが、ここに至って再び僕は参ってしまふ。たぶん誰でも

同じことを考えると思うけれども、僕もまた「結婚」というひとつの区切りについてまず考える。僕は結婚ということに決して特別の考えを持ってはおらず、こだわった考え方もしてはおらず、自然に結婚するような事情が起こればいつでも自然に結婚してしまうつもりなのである。けれども、それで僕の一生に区切りができるかどうか。たぶん区切りはできないと思うし、かりに区切りができたとしても、その区切りによって僕の生活が真実立派になるということは決してないと考える。僕は愚かだけれども、その愚かさは結婚に関係のない事情にもと

づくものである。結婚して、子供も大きくなって七十になつて、そうして、やっぱり、青春——どこにも一生の区切りがない、これは助からぬ話だと僕は恐れをなしてしまふ。

青春再びかえらず、とはひどく綺麗な話だけれども、青春永遠に去らず、とは切ない話である。第一、うんざりしてしまふ。こういう疲れ方は他の疲れとは違って癒なおしようのない袋小路のどんづまりという感じである。世阿弥が佐渡へ流刑のあいだに創つくった謡曲に「檜垣ひがき」というものがある。細かいことは忘れてしまつたけれども荒筋

は次のような話である。なんでも檜垣寺というお寺があ
って（謡曲をよく御存じの方は飛ばして読んで下さい。
どんなデタラメを言うかも知れませんよ）このお寺へ毎
朝あ闕か伽の水をささげにくる老婆がある。いつ来る時も一
人であるが、この老婆の持参の水が柔らかかさ世の常のも
のではない。そこで寺の住持があなたはどこの何人であ
るかと思ねてみると、老婆は一首の和歌を誦しょうしてこの
歌がおわかりであろうか、と言う。あいにくこの和歌を
僕はもう忘れてしまったが「水はぐむ」とか何とかいう
枕言葉に始まっていて、住持にはこの枕言葉の意味がわ

からないのである。この和歌にも相当重要な意味があったはずであるが、しかし、物語の中心そのものではないのだから勘弁していただきたい。そこで住持が不思議に思つて、この枕言葉は聞きなれないものであるが、いったいどういう意味があるのですかと尋ねた。すると老婆が答えて言うには、その意味が知りたいとおっしゃるならば何とか河（これも忘れた）のほとりまで御足勞願いたい。自分はそこに住んでいるから、そのときお話いたしましう、と歸つてしまった。翌日（ではないかも知れぬ。もともと昔の物語は明日も十年後もありやしな

住持は何とか河のほとりへ老婆を訪ねて行ってみた。と、なるほど、一軒の荒れ果てた庵いおりがあるが、住む人の姿はなく、また、人の住むところとも思われぬ廃屋である。と、姿のない虚空に老婆の恐ろしい声がして、いざ、私の昔を語りましょう、と言ひ、自分は、昔、都に宮仕えをして楽しい青春を送ったもので、昨日の和歌は自分の作、新古今だか何かに載っているものである。自分は年老ゆるとともに、若かったころの美貌びぼうが醜く変わって行くのに堪えられぬ苦しみを持つようになった。そうして、そのことを気にして悩みふけて死んでしまったが、そ

のために往生を遂げることができず、いまだに妄執もうしゆうを地上にとどめて迷っている。和尚様おしょうにおいでを願ったのも、ありがたい回向えこうをいただき成仏したいからにほかならぬ、と物語る。そこで和尚は、いかにも回向してあげようが、まず姿を現わしなさい、と命令し、老婆はためらっていたが、しからは醜い姿であさましいがお目にかけましようと言って妄執の鬼女の姿を現わす。そこで和尚は回向を始めるのであるが、回向のうちに、老婆はありし日の青春の夢を追い、ありし日の姿を追うて恍惚こうこつと踊り狂い、成仏する、という筋なのである。

北海の孤島へ流刑の身でこんな美しい物語をつくることは、世阿弥という人の天才ぶりに降参せざるを得ない。ところで、話はそういうことではないのだが、僕がこの物語を友人に語ったところが（僕はあらゆる友人にこの物語を話した）最も激しい感動を現わした人は宇野千代さんであった。この時以来宇野さんは謡曲のファンになり、しきりに観能にでかけ、僕が文学として読んではいても舞台としてほとんど見たことがないので冷やかされる始末になったが、女の人には誰しも老醜を怖れること男の比にはならないのであろうけれども、宇野さんが物語

をきいたときの驚きの深さは僕の頭を離れぬことのひとつである。宇野さんもかなりの年齢になられているから、鬼女の懊惱おうのうが実感として激しかったという意味もあるだろうけれども、失われた青春にこんなにハッキリしたあるいはこんな**に**必死な愛情を持ち得るということで、僕はかえって女の人**が**羨うらやしいような気がしたのだ。この羨しさは、毛頭僕の思いあがった気持ちからではないのである。

女の人には秘密が多い。男が何の秘密も意識せずにごしている同じ生活の中に、女の人**は**色々の微妙な秘密

を見つけたして生活しているものである。特に宇野さんの小説は、私小説はもとより、男の子の話だの、女流選手の話だの老音楽夫人の話だの、語られていることの大部分はこういう微妙な綾あやの上の話なのである。これらの秘密くさい微妙なそして小さな心のひとつひとつが正確に掘りだされてきた宝石のような美しさで僕は愛読しているのだが、さればとて、しからは俺もこういうものを書いてやろうか、という性質のものではない。僕の頭を逆さにふっても、こういうものは出てこない。なるほど宇野流に語られてみれば、こういう心も僕のうちにある

ことが否定できぬが、僕の生活がそういうものを軌道にしてはいないのである。だが、僕は今、文学論を述べることが主眼ではない。

このような微妙な心、秘密な匂いをひとつひとつ意識しながら生活している女の人にとって、一時間一時間が抱きしめたいようにたいせつであろうと僕は思う。自分の身体のどんな小さなもの、一本の髪の毛でも眉毛まゆでも、僕らにわからぬ「いのち」が女の人には感じられるのではあるまいか。まして容貌の衰えについての悲哀と、
いうようなものは、同じものが男の生活にあるにしても、

男女のあり方にははなはだ大きなへだた距りがあると思われ
る。宇野さんの小説の何か手紙だったかの中に「女がひ
とりで眠るといふことのわび侘しさが、おわかりでしうか」
といふ意味の一行があつたはずだが、たいせつな一時間
一時間を抱きしめてゐる女の人が、ひとりといふことに
どのような痛烈な呪のろいをいだいてゐるか、とにかく僕に
も見当はつく。

このよふな女の人に比べると、僕の毎日の生活などは
まるで中味がカラッポだと言つていいほど一時間一時間
が実感に乏しく、かつ、だらしがない。てんでいのちが籠こも

っておらぬ。一本の髪の毛は愚かなこと、一本の指一本の腕がなくなっても、その不便についての実感や、外見を怖れる見栄についての実感などはあるにしても、失われた「小さいのち」というものに何の感覚も持たぬであらう。

だから女の人にとっては、失われた時間というものも、生理に根ざした深さを持つているかに思われ、その絢爛けんらんたる開花の時と凋落ちようらくとの怖るべき距りについて、すでにそれを中心にした特異な思考を本能的に所有していると考えられる。事実、同じ老年でも、女の人の老年は男

に比べてより多く救われ難いものに見える。思考というものが肉体に即している女の人は、そのだいいじの肉体が凋落しては万事休すに違いない。女の青春は美しい。その開花は目覚しい。女の一生がすべて秘密となってその中に閉じこめられている。だから、この点だけから言うと、女の人は人間よりも、もっと動物的なものだという風に言えないこともなさそうだ。実際、女の人は、人生のジャングルや、ジャングルの中の迷路や敵や湧き出る泉や、そういうものに男の想像を絶した美しいイメージを与える手腕を持っている。もし理智というものを取り

去って、女をその本来の肉体に即した思考だけに限定するならば、女の世界には、ただ亡国だけしかあり得ない。女は貞操を失うとき、その祖国も失ってしまふ。かくのごとく、その肉体は絶対で、その青春もまた、絶対なのである。

どうも、しかし、女一般だの男一般というような話になると、たちまち僕の舌は廻らなくなってトンチンカンになってしまふから、このへんで切り上げて、僕はやっぱり僕流に自分一人のことだけ喋ることにしよう。ただ、さっきの話のちよつとした結論だけ書き加えておくと、

女の人は自分自身に関するかぎり、生活の一時間一時間を男に比べてはるかに自覚的に生きている。非常にハッキリと自分自身を心棒にした考え方を持っていて、この観点から言うかぎりには、男に比べてはるかに「生活している」と言わなければなるまいと思う。だいたい先刻の

「檜垣」の話にしても、容貌の衰えを悩むあまり幽霊になつたなどという、光源氏ひかるげんじを主人公にしても男では話にならない。光源氏を幽霊にすることは不可能でもないけれども、すくなくとも男の場合は老齡と結びつけるわけには参らぬ。ここに一人の爺さんがあつて、容貌の衰え

たのを悲嘆のあまり、魂魄こんぱくがこの世にとどまって成仏が
できなくなってしまうた、というのでは読者に与える効
果がよほど違ってくる。むしろ喜劇の畑であろう。女は
非常にせまいけれども、強烈な生活をしているのである。

三好達治が僕を評して、坂口は堂々たる建築だけれど
も、中へ這入はいってみると畳が敷かれていない感じだ、と
言ったそうだ。近ごろの名評だそうで、僕も笑ってしま
ったけれども、まったくお寺の本堂のような大きなガラ
ンドウに一枚のウスベリも見当たらない。たいせつな一
時間一時間をただ何となく迎え入れて送りだしている。

実の乏しい毎日であり、一生である。土足のままヌツと這入りこまれて、そのままズツと出て行かれても文句の言いようもない。どこにも区切りがないのだ。ここにて下駄をぬぐべしと言うような制札がまったくどこにもないのである。

七十になっても、なお青春であるかも知れぬ。そのくせ老衰を嘆いて幽霊になるほどの実のある生活もしたことがない。そのような僕にとっては、青春というものが決して美しいものでもなく、また、特別なものでもない。しからば、青春とは何ぞや？ 青春とは、ただ僕を生か

す力、諸々の愚かなしかし僕の生命の燃焼を常に多少ずつ支えてくれているもの、僕の生命を支えてくれるあらゆる事どもがすべて僕の青春の対象であり、いわば僕の青春なのだ。

愚かと言えば常に愚かでありまた愚かであつた僕であるゆえ、僕の生き方にただ一つでも人並の信条があつたとすれば、それは「後悔すべからず」ということであつた。立派なことだから後悔しないと言うのではない。愚かだけれども、後悔してみても、所詮立ち直ることのできない自分だから後悔すべからず、という、いわば祈り

に似た愚か者の情熱にすぎない。牧野信一が魚籃坂上ぎよらんざかにいたころ、書齋に一枚の短冊が貼りつけてあつて「我事に於て後悔せず」と書いてあつた。菊池寛氏の筆であつた。その後、きくところによれば、これは元来宮本武蔵の言葉だということであつたが、このように堂々と宣言されてみると、宮本武蔵の後悔すべからず、と、僕の後悔すべからずではだ**い**ぶ違**う**。「葉は隠かくれ論語」によると、どんな悪い事でも**い**つた**ん**自分**が**やら**か**してしまつた以上は、美名をつけてごまかしてしまえ、と諭さとしている。そうだけれども、僕はこれほど堂々と自我主義を押し通す

気持ちはない。もつと他人というものを考えずにはいられないし、自分の弱点について、常に思いをいたし、嘆かずにもいられぬ。こういう「葉隠れ論語」流の達人をみると、僕はまっさきに喧嘩けんかがしたくなるのである。

いわば、僕が「後悔しない」と言うのは悪業の結果が野たれ死をしても地獄へ落ちても後悔しない、とにかく俺の精いっぱいのことをやったのだから、という諦めの意味に他ならぬ。宮本武蔵が毅然きぜんとして「我事に於て後悔せず」という、常に「事」というものをハッキリ認識しているのとは話がよほど違うのだ。もつとも、我事に

於て後悔せず、という、こういう言葉を編みださずにいられなかった宮本武蔵は常にどれくらい後悔した奴やら、この言葉の裏には武蔵の後悔が呪いのように聴えてもいる。

僕は自分の愚かさを決して誇ろうとは思わないが、ここに僕の生命が燃烧し、そこに縋すがって僕がこうして生きている以上、愛惜なくして生きられぬ。僕の青春に「失われた美しさ」がなく、「永遠に失われざるための愚かさ」があるのみにしても、僕も亦、僕の青春を語らずにはいられない。すなわち、僕の青春論は同時に淪落論りんらくろんで

もあるという、そのことは読んでいただければわかるであろう。

二 淪落について

日本人は小役人根性が旺盛おうせいで、官僚的な権力を持たせるとたちまち威張り返ってやりきれぬ。というのは近ごろ八百屋だの魚屋で経験ずみのことで、万人等しく認めるところだけけれども、八百屋や魚屋に縁のない僕も、別のところではななだこれを痛感している。

電車の中へ子供づれの親父おやじやおふくろが乗り込んでくる。あるいはお婆さんを連れだした青年が這入ってくる。誰かしら子供やお婆さんに席を譲る。すると間もなく、その隣りの席があいた場合に、先刻、子供やお婆さんに席を譲ってくれた人がそこに立っているにもかかわらず、自分か、自分の連れをかせせてしまう。よく見かける出来事であるが、先刻席を譲ってくれた人に腰かけてもらっている親父やおふくろを見たためしがないのである。つまり子供だのお婆さんだのへの同情に便乗して、自分まで不当に利得を占めるやからで、こういう奴らが役

人になると、役人根性を発揮し、権力に便乗してしようのない結果になるのである。

僕ははなはだ悪癖があつて、電車の中へ婆さんなどがヨタヨタ乗りんでくると、席を譲らないといけないような気持ちになつてしまふのである。けれども、ウツカリ席を譲ると、たちまち小役人根性の厭いやなどところを見せつけられて不愉快になるし、そうかといつて譲らないのもあまり良い気持ちではない。要するに、こういう小役人根性の奴らとは関係を持たないに限るから、電車がガラ空きでない限り、僕は腰かけないことにしている。少し

くらいくたびれても、こういう厭な連中と関係を持たない方が幸福である。

去年の正月近いころ、渋谷で省線を降りて、バスに乗った。バスは大変な満員で、僕ですら喘ぐあえような始末であつたが、僕の隣りに学習院の制服を着用した十歳ぐらいの小学生男子が立っていた。僕の前の席が空いたので、隣りの少年にかけたまえとすすめたら、少年はお辞儀をただけで、かけようとしなかつた。また、席があいたが同じことで少年は満員の人ごみにもまれながら、自分の前の空席に目をくれようとしなかつたのである。

僕はこの少年の躰しんけの良さにことごとく感服した。この少年が信条を守つての毅然たる態度はただみごとで、宮本武蔵と並べてもヒケをとらない。学習院の子供たちがみんなこうではあるまいけれども、すくなくとも育ちの良さというものを痛感したのである。

このような躰しんけの良さは、必ずしも生家の榮譽や富に關係はなからうけれども、しかしながら、生家の榮譽とか、富に対する誇りとか、顧みて怖おびれ怯おびゆるものを持たぬ背景があるとき、凡人といえども自らかかる毅然たる態度を維持することができやすいと僕は思う。

とはいえ、栄誉ある家門を背景にした子供たちが往々生まれながらにしてかかる躰けの良さを身につけているにしても、栄誉ある人々の大人の世界も子供の世界もおしなべて決して常にかくのごときものではない。のみならず、大人の世界における貴族的性格というものは、その悠々たる態度とか毅然たる外見のみで、外見と精神に何の脈絡なく、真の貴族的精神というものは、また、おのずから、別個のところにあるのである。躰けよき人々は、ただ他人との一応の接触に於て、礼儀を知っているけれども、実際の利害関係が起こった場合に、自己を犠

犠にすることができるか。甘んじて人に席を譲るか。むしろ他人を傷つけてみずからは何の悔いもない底たいの性格をつくりやすいと言い得るであろう。

けだし、大人の世界において、犠牲とか互譲とかいたわりとか、そういうものが礼儀でなしに生活として育っているのは淪落りんらくの世界なのである。淪落の世界においては、人々は他人を傷つけることの罪悪を知り、人の窮迫にあわれみと同情を持ち、口頭ではなく実際の救い方を知っており、また、行なう。また、彼らは人の信頼を裏切らず、常に仁義というものによってみずからの行動を

律しようとするのである。

とはいえ、彼らの仁義正しいのは主として彼ら同志の世界においてだけだ。一足彼らの世界をでると、つまり淪落の世界に属さぬ人々に接触すると、彼らは必ずしも仁義を守らぬ。なぜなら淪落の人々はおおむね性格破産者的傾向があるし、またいくらかずつ悪党で、いわば自分自身を守るために、同僚を守ったり、彼らの秩序を守ったりするけれども、外部に対してまで秩序を守る必要を認めないからでもあるし、だいたい彼らの秩序と一般家庭の秩序とは違っているから、別に他意がなくとも

食い違ふことができてしまう。

乞食を三日すると忘れられない、と言うけれども、淪落の世界も、もし独立不羈ふきの魂を殺すことができたら、これぐらい住みやすく沈淪しやすいところもない。いわば、着物もいらず住宅もいらず、野生の食物にも事欠かぬ南の島のようなものだ。だから僕は淪落の世界を激しく呪い、激しく憎む。不羈独立の魂を失ったら、僕などはただ肉体の屑くずにすぎない。だから僕の魂は決してここに住むことを欲しないにもかかわらず、どうして僕の魂は、また、この世界に憩いを感じ、ふるさとを感じるの

であろうか。

今年の夏、僕は新潟へ帰って、二十年ぶりぐらいで、白山様の祭礼を見た。昔の賑にぎわいはなかったが、松下サーカスと言っているのが掛かっていた。僕は曲馬団で空中サーカスと言っているブランコからブランコへ飛び移るのが最も好きだが、松下サーカスは目星しい芸人が召集でも受けているのか、座頭の他には大人がなく、非常に下手で、半分ぐらい飛び移りそこねて墜落してしまう。このあとでシバタサーカスと言ったのを見たが、この方はピエロの他は一人も墜落しなかった。一見したところ真ん中

のブランコが一番たいせつのようにだけれども、実際は両側のブランコに最も熟練した指導者が必要でこの人が出発の呼吸をはかってやるのである。シバタサーカスは真ん中のブランコが女だけれども、両側のブランコに二人の老練家がついているから、全然狂いがない。松下サーカスは真ん中のブランコに長老が乗っているが、両側が子供ばかりで指導者がいないのだ。

落ちる。落ちる。そうして、また、登って行く。彼らが登場した時はただの少年少女であったが、落ちては登り、今度はという決意のために大きな眼をむいて登って

行く気魄きはくをみると、涙が流れた。まったく、必死の気魄であつた。長老を除くと、その次に老練なのは、ようやく十九か二十ぐらいの少年だったが、この少年は何か猥褻な感じがして見たくないような感じだったが、この少年が最後の難芸に失敗して墜落したとき、彼が齒を喰いしばりカツと眼を見開いて何か夢中の手つきで耳あての紐ひもを締め直しながら再び綱にすがつて登りはじめた時は、猥褻の感などはもはやどこにもなかった。神々こつこつしいぐらい、ただいちずに必死の気魄のみであつたのである。その美しさに打たれた。

いつか真杉静枝さんに誘われて帝劇にレビューを見た
ことがあったが、レビューの女に比べると、あの中へ現
われていっしょに踊る男ぐらい馬鹿に見えるものはな
い。あんまり低脳な馬鹿に見えて同性の手前僕がいささ
かクサつていると、真杉さんが僕に向いて、どうしてレ
ビューの男たちってあんなに馬鹿に見えるのでしよう
か、と^{つぶや}呟いた。男には馬鹿に見えても、女の人にはま
た別なふうに見えるのだろうと考えていた僕は、真杉さ
んの言葉をきいて、女の人にもやっぱりそうなのかと改
めて感じ入ったしだいである。

ところが、僕は一度例外を見たのである。

それは京都であつた。昭和十二年か十三年。京都の夏は暑いので、僕は毎日十銭握つてニユース映画館へ這入り、一日じゅう休憩室で本を読んだりしていた。ニユース映画館はスケート場の付属で、ひどく涼しいのだ。あのころは仕事に自信を失つて、何度生きるのをやめにしよふと思つたかshれない。新京極に京都ムーランというレビューがあつて、そこへよく身体を運んだ。まづたく、ただ身体を運んだだけだ。おもしろくはなかつた。僕の見ただつた一度の例外というのは、だから、京都ムーラ

ンではないのである。

京都ムーランよりももつと上手な活動小屋へ這入った
ら、偶然アトラクションにレビュウをやっていた。小さな活動小屋のアトラクションだから、レビュウははなはだ貧弱である。女が七、八人に男が一人しかない。ところが、このたった一人の男が僕の見参けんざんした今までの例をくつがえして、この男が舞台へでると、女の方が貧弱になってしまふのである。何か木魚みみたいなものを叩いてアホダラ経みみたいなものを唸ったりしていたのを思い出すが、堂々たる男の貫禄が舞台にみち、男の姿がずぬ

けて大きく見えたばかりでなく、女たちが男のまわりを安心しきって飛んでいる蝶ちようのような頼りきった姿に見えて、うれしい眺めであつた。まったくレビューの男にあんな頼もしい貫禄を見ようとは予期しないところであつた。

こういう印象は日がたつにつれて極端なものになる。男の印象がしだいに立派に大きなものになりすぎて、ほかのレビューの男たちがますます馬鹿に見えて仕方がなくなるのである。あれぐらいの芸人だから浅草へ買われ
てこないはずはなかろうと思ひ、もう一度見参したいと

思ったが、あいにく名前を覚えていない。会えばわかるはずだから、浅草や新宿でレビューを見るたびに注意したが再会の機会がない。

ところが、この春、浅草の染太郎というウチで淀橋太郎氏と話をした。この染太郎は好み焼屋だが、花柳地の半玉相手のお好み焼と違って、牛てんだのエビてんなどはあまり焼かず、酒飲み相手にオムレツでもビフテキでも魚でも野菜でも何でも構わず焼いてしまう。近ごろ我々の仲間、「現代文学」の連中は会というとたいがいこのウチでやるようなことになり、我々の大いに愛用す

るウチだけれども、我々のほかにはレビュー関係の人たちが毎晩飲みにくる所なのである。そういうわけで淀橋太郎氏と時々顔を合わせて話を交わしたりするようになり、ある日、京都ムーランの話がでた。そこで、雲をつかむような話で所詮わかるはずがないだろうと思ったけれども、同じころ、活動小屋のアトラクションにでた男の名前がわからないかと訊いてみた。すると僕が呆れ果てたことにはタロちゃんちよつと考えていたが、それはモリシンです、といともアツサリ答えたものである。当時京都の活動小屋へアトラクションに出たのはモリシン

以外にない。小屋の場所も人数もそっくり同じだから疑う余地がないと言うのであった。一緒にいた数人のレビユーの人たちがみんなタロちゃんの言を裏書きした。モリシンは渾名あだなで、芸名はモリカワシン、たぶん森川信と書くのか、そういう人であった。常に流れ去り流れ来たっているようなこの人人の足跡のひとつ、数年前の京都の小さな活動小屋の出来事がこんなにハッキリ指摘されるものだとは。僕もはなはだ面喰らった。

僕は梅若万三郎や菊五郎の舞台よりも、サーカスやレビユーを見るのが好きなのだ。それはまた、第一流の

料理を味わうよりも、ただ酒を飲むことが好きなのと同じ。しかし、僕は酒の味が好きではない。酔っ払って酒の臭味がわからなくなるまでは、息を殺して我慢しながら飲み下しているのである。

人は芸術が魔法だと言うかもしれないが、僕には少し異論がある。対坐したのでは猥褻見るに堪えがたくて擲りなぐたくなるような若者がサーカスのブランコの上へあがると神々しいまでに必死の気魄で人を打ち、全然別人の奇蹟を行なってしまう。これは魔法的な現実であり奇蹟であるが、しかもこの奇蹟は我々の現実や生活が常にこの

奇蹟と共にあるきわめて普通の自然であつて、決して超現実的なものではない。レビューの舞台上で柔弱低脳の男を見せつけられては降参するが、モリカワシンの堂々たる男の貫禄とそれを取りまいて頼りきつた女たちの遊樂の舞台を見ると、女たちの踊りがどんなに下手でもまた不美人でもいっこうにさしつかえぬ。甘美な遊樂が我々を愉たのしくさせてくれるのである。これも一つの奇蹟だけれども、常に現実と直接不離の場所にある奇蹟で、芸術の奇蹟ではなく、現実の奇蹟であり、肉体の奇蹟なのである。酒もまた、僕にはひとつの奇蹟である。

僕は碁が好きだけれども、金銭を賭けるかことは全く好まぬ。むしろ、かかる人々を憎み蔑さげすむのである。だいたい、賭け事というものは運を天にまかして一いちか八ばちかというところに最後の意味があるのである。サイコロとルーレットのようなものが、ほんとうの賭け事なのだ。碁のような理智的なものは、勝敗それ自身が興味であって、金銭を賭けるべき性質のものではない。運を天にまかして一か八かという虚空から金がころがりこむなら大いに嬉しくもなろうけれども、長時間にわたって理智を傾けつくす碁のようなもので金銭を賭けたのでは、いちばん

見たくない人間の悪相をさらけだして汚らしくいどみ合うようなもので、とても厭らしくて勝負などはできぬし、勝つ気にもなれぬ。ああいう理智的なもので金銭を賭ける連中は品性最も下劣な悪党だと僕は断定している。

しかしながら、カジノのルーレットのごときもの、いささかの理智もなく、さりとしてイカサマもあり得ない。かかるものもまた現実のもつ奇蹟のひとつである。人はあそこに金を賭けているのではなく、ただ落胆か幸福か、絶望か蘇生そせいか、実際死と生を天運にまかせて賭ける人もいるのだ。あそこではみずからを裁くほかには犠牲者、

被害者が誰もいない。理智という嵐が死に、我みずからを裁くに、これぐらいあつら詭え向きの戦場はないのである。

我が青春は淪落だ、と僕は言った。しかして、淪落とは、右のごときものである。すなわち、現実の中に奇蹟を追うこと、これである。この世界は永遠に家庭とは相容れぬ。破滅か、しからずんば——あ嗚呼あ、しかし、破滅以外の何物があり得るか！ 何物があり得ても、おそろく満ち足りることがあり得ないのだ。

この春、愛妻家の平野謙が独身者の僕をみつめてニヤニヤ笑いながら、決死隊員というものは独身者に限るそ

うだね、妻帯者はどうもいかんという話だよ、とおつしやるのである。これは平野謙の失言だろうと僕は思った。原稿紙に向かえば、こういう気楽な断定の前に、まだいろいろと考えるはずの彼なのである。こうなると、女房というものはまるで特別の魔女みたいなものだ。ひどく都合のいいものである。女一般や恋人はどうなるのか。女房はとにかくとして、有情の男子たるもの、あに女性なくして生き得ようか。

とはいうものの、僕はまた考えた。これはやっぱり平野君の失言ではない。こういう単純怪奇な真理が実際に

おいてあり得るのである。それは女房とか家庭というものの自体にこのような魔力があるのではなく、女房や家庭をめぐって、こんなふうな考え方があり得るといふ事柄のうち、この考えが真理でもあるといふ実際の力が存在しているのである。こういう考え方があり、こういうふうを考えることによつて、こういうふうに限定されてしまふのである。真理の一面はたしかにこういうものである。

実際、わが国においては、夫婦者と独身者に非常にハッキリと区別をつけている。それは決して事変このかた

生めよ殖やせよのせいではなく、もつと民族的なはなはだ独特な考え方だと僕は思う。独身者は何かまだ一人前ではないというような考え方で、それは実際男と女の存在する人間本来の生活形態から言えばたしかに一人前の形をそなえておらぬかもしれぬけれども、たとえば平野謙のごとき人が、まるで思想とか人生観というものにも、この両者が全然異質であるかのような説をなす。俗世間のみの考えでなく、平野君のごとき思索家においても、なお、かような説を当然として怪しまぬ風があるのである。

僕はかような考え方を決して頭から否定する気持ちはない。むしろはなはだユニツクな国民的性格をもった考え方だと思ふのである。

実際、思つてもみなさい。このような民族的な肉体をもった考えといふものは真理だとか真理でないと言つたところで始まらぬ。実際、僕の四圍の人々は、みんなそう考え、そう生活しているのである。あるいは、そう生活しつつ、そう考えているのである。彼らは実際そう考えているし、考えている通りの現実が生まれてきているのだ。これでは、もう、喧嘩にならぬ。僕ですら、もし

家庭というものに安眠しうる自分を予想することができ
るなら、どんなに幸福であろうか。芥川龍之介が「河童」かっぱ
か何かの中に、隣りの奥さんのカツレツが清潔に見える、
と言っているのは、僕もはなはだ同感なのである。

しかし、人性の孤独ということについて考えるとき、
女房のカツレツがどんなに清潔でも、魂の孤独は癒いやされ
ぬ。世に孤独ほど憎むべき悪魔はないけれども、かくの
ごとく絶対にして、かくのごとく蔽たる存在もまたすく
ない。僕は全身全霊をかけて孤独を呪う。全身全霊をか
けるがゆえに、また、孤独ほど僕を救い、僕を慰めてく

れるものもないのである。この孤独は、あに独身者のみならんや。魂のあるところ、常に共にあるものは、ただ、孤独のみ。

魂の孤独を知れる者は幸福なるかな。そんなことがバ
イブルにでも書いてあったかな。書いてあったかもしれ
ぬ。けれども、魂の孤独などは知らない方が幸福だと僕
は思う。女房のカツレツを満足して食べ、安眠して、死
んでしまう方がしあわ倖せだ。僕はこの夏新潟へ帰り、たく
さんの愛すべき姪めいたちと友達になって、僕の小説を読ま
してくれとせがまれた時には、ほんとに困った。すくな

くとも、僕は人の役に多少でも立ちたいために、小説を書いている。けれども、それは、心に病ある人の催眠薬としてだけだ。心に病なき人にとっては、ただ毒薬であるにすぎない。僕は僕の姪たちが、僕の処方の催眠薬をかりなくとも満足に安眠できるような、平凡な、小さな幸福を希ねがっているのだ。

数年前、二十歳で死んだ姪があつた。この娘は八ツのころから結核性関節炎で、冬は割合いいのだが夏が悪いので、暖かくなると東京へ来て、僕の家へ病臥し、一か

月に一度ぐらいずつギブスを取り換えに病院へ行く。ギブスを取り換えるころになると、膿うみの臭気が家中に漂つて、やりきれなかつたものである。傷口は下腹部から股のあたりで、穴が十一ぐらいあいていたそうだ。

八ツの年から病臥したきりで発育が尋常でないから、十九の時でも肉体精神ともに十三、四ぐらいだった。全然感情というものが死んでいる。何を食べても、うまいとも、まずいとも言わぬ。決して腹を立てぬ。決して喜ばぬ。なつかしい人が見舞いに来ててもニコリともせず、その別れにサヨナラも言わぬ。いつもただ首を上げてチ

ヨツト顔をみるだけで、それが久闊きゆうかつの挨拶であり、別離の辞である。空虚な人間の挨拶などは、しゃべる気がしなくなっているのであった。その代わり、どんなに長い間、なつかしい人たちが遊びにきてくれなくとも、不平らしい様子などはまったく見せない。手のかかる小さな子供があつたので、母親はめつたに上京できなかつたが、その母親がやってきてもニコリともしないし、イラツシヤイとも言わぬ。別れる時にサヨナラも言わず、悲しそうでもなく、思いつきの気まぐれすらしやべる気持ちにはならないらしい。それでも、一度、朝母親が故郷

へ立ってしまった夕方になって、食事のとき、もう家へついたかしら、とふと言った。やっぱり、考えているのだと僕は改めて感じたほどだった。毎日、「少女の友」とか「少女倶楽部くらぶ」というような雑誌を読んで、さもなければボンヤリ虚空をみつめていた。

それでもまれに、よっぽど身体の調子のいいとき、東宝へ少女歌劇を見に連れて行ってもらった。相棒がなければそんな欲望が起こるはずがなかったのだが、あいにく、そのころ、もう一人の姪が泊まっていて、この娘は胸の病気の治ったあと楽な学校生活をしながら、少女歌

劇ばかり見て喜んでいた。この姪が少女歌劇の雑誌だの
ブロマイドを見せてアジるから、一方もそういう気持ち
になっってしまうのは仕方がない。もつとも、見物のあと、
やっぱりおもしろいとも言わないし、つまらないとも言
わなかった。相変わらず表情も言葉もなかったのである。
それでも、胸の病の娘がかがみこんで、ねえ、ちよつと
でいいから笑ってごらんなさい。一度でいいから嬉しそ
うな顔をしなさいったら。こら、くすぐってやろうか、
などといったずらをすると、関節炎の娘はうるさそうに首
を動かすだけだったが、それでもまれには、いくらか上

氣して、二人で話をしていゝこともあつた。それも二言か三言で、あとは押し黙つて、もう相手にならうともしないのである。胸の病の娘の方は陽氣で吞氣千萬な娘だつたのに、二十一年、原因のわからぬ自殺をとげてしまつた。雪國のふるさとの沼へ身を投げて死んでいた。この自殺の知らせが来たときも、関節炎の娘は全然驚きもせず、また、しゃべりもせず、何を訊こうともしなかつた。

その後、子規の「仰臥漫録」を読んだが、子規も姪と同じような病氣であつたらしい。場所も同じで、やっぱ

り腹部であつた。子規のころにはまだギブスがなかつたとみえ、毎日繃帯を取り換えている。繃帯を取り換えるとき「号泣又号泣」と書いてある。姪の方もさすがに全身の苦痛を表わす時があつたが、泣いたことは一度もなかつた。

明治三十五年三月十日の日記に午前十時「此日始メテ腹部ノ穴ヲ見テ驚ク穴トイフハ小キ穴ト思ヒシニガランドナリ心持悪クナリテ泣ク」とある。その日の午後一時には「始終ドコトナク苦シク、泣ク」とも書いてある。子規は大人だから泣かずにいられなかつたのだらうが、

娘の方は十一もある穴を見たとき、まったく無表情で、もとより泣きはしなかった。食事だけが楽しみで、毎日の日記に食物とその美味、不味ばかり書いている子規。何を食べても無言の娘。この二人の世界では、大人と子供がまったく完全に入れ違いになっているので、僕は「仰臥漫録」を読む手を休めて、なんべん笑ってしまったか知れなかった。(こんなことを書くと、こころごと 渋川驍君のごとく、不謹慎で不愉快きわまるなどというお叱言がまた現われそうだが、それでは、いっそ「なつかしい笑いであった」というような惨めな蛇足をつけたしてやろうか。

まったく困った話である)

しかし、この話はただこれだけで、なんの結論もないのだ。なんの結論もない話をどうして書いたかというところ、僕が大いに気負って青春論（または淪落論）など書いているのに、まるで僕を冷やかすように、ふと、姪の顔が浮んできた。なるほど、この姪には青春も淪落も馬耳東風で、僕はいささか降参してしまつて、ガツカリしているうちに、ふと書いておく気持ちになつた。書かずにいられない気持ちになつたのである。ただ、それだけ。

僕はしだいに詩の世界にはついて行けなくなってきた。僕の生活も文学も散文ばかりになってしまった。ただ事実のまま書くこと、問題はただ事実のみで、文章上の詩というものが、たえられない。

僕が京都にいたころ、碁会所で知り合った特高の刑事の人で、俳句の好きな人があった。ある晩、四条の駅でいっしょになって電車の中で俳句の話をしながら帰ってきたが、この人は虚子が好きで、子規を「激しすぎるから」嫌いだ、と言っていた。

けれども「仰臥漫録」を読むと、号泣又号泣したり、

始めて穴をみて泣いたりしている子規が同じ日記の中で
 「五月雨さみだれヲアツメテ早シ最上川（芭蕉）此句俳句ヲ知ラ
 又内ヨリ大キナ盛ンナ句ノヤウニ思フタノデ今日迄古今
 有数ノ句トバカリ信ジテ居タ今日フト此句ヲ思ヒ出シテ
 ツクヾ、ト考ヘテ見ルト『アツメテ』トイフ語ハタクミ
 ガアツテ甚ダ面白クナイソレカラ見ルト五月雨ヤ大河ヲ
 前ニ家ニ軒（蕪村）トイフ句ハ遙カニ進歩シテ居ル」と
 いう実のない俳論をやっている。子規の言っていること
 は単に言葉のニュアンスに関する一片の詩情であって、
 何事を歌うべきか、いかなる事柄を詩材として提出すべ

きか、といういちばんたいせつな散文精神が念頭にない。号泣又号泣の子規は激しいけれども、俳句としての子規は激しくなく平凡である。「白描」の歌人を菱山修三は激しすぎるから厭だ、と言った。まったくこの歌は激しいのだから、厭だという菱山の言もうなずけるが、僕はこの激しさに惹ひかれざるを得ぬ。

僕も一昔前は菊五郎の踊りなど見て、これを楽しんだりしたこともあったが、今はもうそういう楽しみが全然なくなってしまった。曲馬団だとか、レビューだとか、酒だとか、ルーレットだとか、そういう現実と奇蹟の合

一、肉体のある奇蹟の追求だけが生き甲斐がになつてしまつたのである。

子規は単なる言葉のニュアンスなどにとらわれて俳句をひねっているけれど、その日常は号泣又号泣、甘やかしようもなく、現実の奇蹟などを夢みる甘さはなかつたであろう。しかるに僕は、いっさいの言葉の詩情に心の動かぬ頑固がんこな不機嫌を知つた代わりに、現実に奇蹟を追うという愚かな甘さを忘れることができない。忘れることができないばかりでなく、生存の信条としてあるのである。

大井広介は僕が決して畳の上で死なぬと言った。自動車にひかれて死ぬとか、歩いてるうちに脳溢血でバツタリ倒れるとか、戦争で弾に当たるとか、そういう死に方しかあり得ないと言う。どこでどう死んでも同じことだけれども、何か、こう、家庭的なものに見離されたという感じも、決して楽しいものではないのである。家庭的ということの何か不自然に束縛し合う偽りに同化のできない僕ではあるが、その偽りに自分を縛って甘んじて安眠したいと時に祈る。

一生涯めくら滅法に走りつづけて、行きつくくゴールと

いうものがなく、どこかしらでバツタリ倒れてそれがようやく終わりである。永遠に失われざる青春、七十になっても現実の奇蹟を追うてさまようなどは、毒々しくて厭だとも考える。甘くなさそうできて、何より甘く、深刻そうできて何より浅薄でもあるわけだ。

スタンダールは青年の頃メチルドという婦人に会い、一度別れたきりたぶん再会しなかつたと記憶しているが、これをわが永遠の恋人だと言っている。折にふれてメチルドを思いだすことによつて常に倅せであつたとも言ひ、この世では許されなくても、神様の前では許され

るだろうなどと大袈裟おおげさなことを言っている。本気かどうかわからないが、平然としてこう甘いことを言い、又ケ又ケとしたところがおもしろい。スタンダードと仲がよいような悪いようなメリメは、これはまた変わった作家で、生涯ほとんどたった一人の女だけを書きつづけた。彼の紙の上以外には決して実在しない女である。コロンバでありカルメンであり、そうして、この女は彼の作品の中でしだいに生育して、ヴィナス像になって、言いよる男を殺したりしている。

だが、メリメやスタンダードばかりではない。人は誰

しも自分一人のしかし実在しない恋人を持っているのだ。この人間の精神の悲しむべき非現実性と、現実の家庭生活や恋愛生活との開きを、なんとかして合理化しようとする人があるけれども、これは理論ではどうにもならないことである。どちらか一方をとるよりほかには仕方がなかろう。

一昔前の話だけれども、そのころ僕はある女の人が好きになって、会わない日にはせめて手紙ぐらい貰もらわないと、夜がねむれなかった。けれども、その女の人には僕のほかにも恋人があつて僕よりもそっちの方が好きなのだ

と僕は信じていたので、僕は打ち明けることができなかつた。そのうちに女の人とも会わなくなつて、やがて僕は淪落の新たな世間に瞬きしていたのであつた。僕はもう全然生まれ変わつていた。僕はとてもスタンダールのようにヌケヌケしたことが言えないので、正直なところ、この女の人にはもう僕の心に住んでいない。ところが、会わなくなつてから三年目ぐらいに（その間には僕は別の女の人と生活していたこともあつた）女の人が突然僕を訪ねてきて、どうしてあのところ好きだと一言言つてくれなかつたと詰問きつもんした。女の人にも内心は最も取り乱してい

たのであろうが、外見はしごく冷静で落ち着いて見えた。僕はすっかり取り乱してしまったのである。忘れていた激情がどこからか溢れてきて、僕はこの女の人と結婚する気持ちになった。それから一か月ぐらいというもの、二人は三日目ぐらいずっと会っていたが、淪落の世界に落ちた僕はもう昔の僕ではなく、突然取り乱して激情に溺おぼれたりしても、ほんとはこの人がそんな激しい対象として僕の心に君臨することはもうできなくなっていたのである。

女の人がこれに気づいて先に諦めてしまったのは非常

に賢明であつたと僕は思う。女の人が、もう二度と会わない、会うと苦しいばかりだから、ということを手紙に書いてよこしたとき、僕も全く同感した。そうして、まったく同感だから再び会わないことにしましょう、という返事をだして、実際これで一つの下らないことがハッキリ一段落したという幸福をすら覚えた。今まで偶像だつたものをハッキリ殺すことができたという喜びであつた。この偶像が亡びても、決して亡びることのない偶像が生まれてしまったのだから、仕方がない。さりとて僕にはヌケヌケとスタンダードのメチルド式ぐさの言い種をた

のしむほどの度胸はないし、過去などはみんな一片の雲になつて、しかし、スタンダールの墓碑銘の「生き、書き、愛せり」ということが、改めてハツキリ僕的生活になつたのだ。だが、愛せり、は蛇足かも知れぬ。生きることのシノニイムだ。もつとも、生きることが愛すことのシノニイムだとも言つていい。

三 宮本武蔵

突然宮本武蔵の剣法が現われてきたりすると驚いて腹

を立てる人があるかも知れないけれども、別段に鬼面人を驚かそうとする魂胆があるわけでもなく、まして読者を茶化す思いは寸毫すんごうといえども無いのである。僕には、僕の性格とともに身についた発想法というものがあって、どうしてもその特別の発想法によらなければ論旨をつくしがたという定めがある。僕の青春論には、どうしても宮本武蔵が現われなくては納まりがつかないという定めがあるから、そのことは読んで理解していただく以外に方法がない。

戦争このかた「皮を切らして肉を切り、肉を切らして

骨を切る」という古来の言葉が愛用されて、我々の自信を強めさせてくれている。先日読んだ講釈本によると柳生流の極意だということであるが、真偽のほどは請け合わない。とにかく何流かの極意の言には相違ないの
で、僕がこれから述べようとする宮本武蔵の試合ぶりは、常に正しくこの極意のとおりにはほかならなかった。

しかしながら「肉を切らして骨を切る」という剣術の極意は、必ずしも武士道とは合致しないところがある。具そなえなき敵に切りかかつては卑怯だとか、一々名乗りをあげて戦争するとか、いわゆる武士道的形式に従うと剣術

の極意に合わない。「剣術」と「武士道」とは別の物だと言つてしまえば、まさしくそのとおりであつて、武士道は必ずしも剣道ではない。主に対する臣というものの機構から生まれてきた倫理的な生き方全般に関するもので、一剣術の極意をもつて律することはできがたいゆえんであるが、逆に武士道から剣を律しようとして「剣は身を守るものだ」と言つたり、村正の剣は人を切る邪剣で正宗の剣は身を守る正剣だ、などと言ふことになる。両者の食い違ふところが非常にハッキリしてくるのである。

劍術には「身を守る」という術や方法はないそうだ。敵の切りかかる劍を受け止めて勝つという方法はないというのだ。大人と子供ぐらい腕が違えばとにかく、武芸者同志の立合いならちよつとでも先によけい切った方が勝つ。肉を切らして骨を切るというのが、正しく劍術の極意であつて、あえて流派には限らぬ普遍的な真理だという話である。

いったい武士というものは常に腰に大小を差しており、寸毫の侮辱にも刀を抜いて争わねばならぬ。また、どういふ偶然で人の恨みを買うかも知れず、いつ、いか

なるときはくじん白刃の下をくぐらねばならぬか、測りがたきものである。そうして、いったん白刃を抜き合う以上、相手を倒さねば、必ずこちらが殺されてしまう。死んでしまつては身も蓋ふたもないから、是が非でも勝たねばならぬ理だ。一か八かということが常に武士の覚悟の根柢になればならぬはずで、それに対する万全の具えが剣術だと僕は思う。

だが、剣術本来の面目たる「是が非でも相手を倒す」という精神ははなはだ殺伐で、これをただちに処世の信条におかれては安寧をみだす憂いがあるし、平和の時の

心構えとしてはふさわしくないとある。そんなわけでも、剣術本来の第一精神があらぬ方へ韜晦とうかいされた風があり、武芸者たちも老年に及んで鋭気が衰えれば家庭的な韜晦もしたくなるろうし、剣の用法もしだいに形式主義に走って、本来殺伐、あくまで必殺の剣が、何か悟道的な円熟を目的とするかのような変化を見せたのであろうと思われる。けだし剣本来の必殺第一主義ではその荒々しさ激しさに武芸者自身が精神的に抵抗しがたくなつて、いい加減で妥協したくなるのが当然だ。

相手をやらなければこちらが命をなくしてしまう。まさに生死の最後の場だから、いつでも死ねるといふ肚はらがすわっていればこれに越したことはないが、こんな覚悟というものは口で言いやすいけれども達人でなければできらるものではない。

僕は先日勝海舟の伝記を読んだ。ところが海舟の親父の勝夢酔という先生が、奇々怪々な先生で、不良少年、不良青年、不良老年と生涯不良で一貫した御家人くずれの武芸者であった。もっとも夢酔は武芸者などともっともらしいことを言わず剣術使いと自称しているが、老年

に及んで自分の一生をふりかえり、あんまり下らない生涯だから子々孫々のいましめのために自分の自叙伝を書く気になって「夢酔独言」という珍重すべき一書を遺した。

ゆうとうざんまい 遊蕩三昧に一生を送った剣術使いだから夢酔先生ほとんど文章を知らぬ。どうして文字を覚えたかと言うと、二十一か二のとき、あんまり無頼な生活なので座敷牢へ閉じこめられてしまった。その晩さっそく格子を一本はずしてしまつて、いつでも逃げだせるようになったが、その時ふと考えた。俺もいろいろと悪いことをして座敷

牢へ入れられるようになったのだから、まあしばらく這入っていてみようという気になったのだ。そうして二年ほど這入っていた。そのとき文字を覚えたのである。

それだけしか習わない文章だから実用以外の文章の飾りは何も知らぬ。文字どおり言文一致の自叙伝で、俺のようなバカなことをしちや駄目だぜ、としゃべるように書いてある。

僕は「勝海舟伝」の中へ引用されている「夢酔独言」を読んだだけで、原本を見たことはないのである。なんとかして見たいと思って、友達の幕末に通じた人には全

部手紙で照会したが一人として「夢酔独言」を読んだという人がいなかった。だが「勝海舟伝」に引用されている一部分を読んだだけでも、これはまことに驚くべき文献のひとつである。

この自叙伝の行間に不思議な妖気を放ちながら休みなく流れているものが一つあり、それは実に「いつでも死ぬる」という確乎不拔、大胆不敵な魂なのだった。読者のために、今、多少でも引用してお目につけたいと思ったのだが、あいにく「勝海舟伝」がどこへ紛失したか見当たらないので残念であるが、実際一ページも引用すれ

ばただちに納得していただける不思議な名文なのである。ただ淡々と自分の一生の無頼三昧の生活を書き綴つたものだ。

子供の海舟にも悪党の血、いや、いつでも死ぬる、というようなものがかなり伝わって流れてはいる。だが、親父の悠々たる不良ぶりというものは、なにか芸術的な安定感をそなえた奇怪な見事さを構成しているものである。いつでも死ぬる、と一口に言っただけなら簡単だけれども、そんな覚悟というものは一世紀に何人という少数の人が持ち得るだけのきわめてまれな現実である。

常に白刃の下に身を置くことを心掛けて修業に励む武芸者などは、この心掛けが当然あるべきようであり、実は決してそうではない。結局、直接白刃などとは関係がなく、人格のもっと深く大きなスケールの上で構成されてくるもので、一王国の主たるべき性格であり、改新的な大事業家たるべき性格であって、この稀有けうな大覚悟の上に自若と安定したまま不良無頼な一生を終わったという勝夢酔が例外的な不思議な先生だと言わねばならぬ。勝海舟という作品を創るだけの偉さを持った親父ではあ

った。

夢酔の覚悟に比べれば、宮本武蔵は平凡であり、ボンクラだ。武蔵六十歳の筆になるという「五輪書ごりんのしょ」と「夢酔独言」の気品の高低を見ればわかる。「五輪書」には道学者的な高さがあり「夢酔独言」には戯作者げさくしゃ的な低さがあるが、文章にそなわる個性の精神的深さというものは比すべくもない。「夢酔独言」には最上の芸術家の筆をもつてようやく達しうる精神の高さ個性の深さがあるのである。

しかしながら、晩年の悟りすました武蔵はとにかくと

して、青年客気の武蔵はこれまた希有な達人であつたといふことについて、僕はしばらく話をしてみたいのである。

晩年宮本武蔵が細川家にいたとき、殿様が武蔵に向かつて、うちの家来の中でお前のメガネにかなうような剣術の極意に達した者がいるだろうか、と訊たずねた。すると武蔵が一人だけござりますと言つて、都甲太兵衛という人物を推奨した。ところが都甲太兵衛という人物は剣術がカラ下手なので名高い男で、またほかに取り柄というものも見当たらぬ平凡な人物である。殿様もはなはだ呆あき

れてしまつて、どこにあの男の偉さがあるのかと訊いてみると、本人に日ごろの心構えをお訊ねになればわかりましよう、という武蔵の答え。そこで都甲太兵衛をよびよせて、日ごろの心構えというものを訊ねてみた。

太兵衛はしばらく沈黙していたが、さて答えるには、自分は宮本先生のおメガネにかなうような偉さがあるとは思わないが、日ごろの心構えということについてのお訊ねならば、なるほど、笑止な心構えだけでも、そういうものが一つだけあります。元来自分は非常に剣術がヘタで、また、生来臆病者で、いつ白刃の下をくぐるよ

うなことが起こって命を落とすかと思うと夜も心配で眠れなかった。とはいえ、剣の才能がなくて、剣の力で安心立命をはかるといふわけにも行かないので、結局、いつ殺されてもいいという覚悟ができれば救われるのだということを確信するに至った。そこで夜ねむるとき顔の上へ白刃をぶらさげたりして白刃を怖れなくなるようなさまざまなくふうを凝らしたりした。そのおかげで、近ごろはどうやら、いつ殺されてもいい、という覚悟だけできて、夜も安眠できるようになったが、これが自分のたった一つの心構えとでも申すものでありましよう

か、と言ったのだ。すると傍にひかえていた武蔵が言葉を添えて、これが武道の極意でございます、と言ったという話である。

都甲太兵衛はその後重く用いられて江戸詰の家老になったが、このとき不思議な手柄をあらわした。ちようど藩邸が普請中で、建物はできたがまだ庭ができていなかった。ところが殿様が登城してほかの殿様と話のうちに、庭ぐらい一晩でできる、とウツカリ口をすべらして威張ってしまった。苦勞を知らない殿様同志だから、人の揚げ足をとったとなるともう放さぬ。それでは今晚一晩で

庭を作ってみせてください。ああよろしいとも。キツと
です。ね。ということになって、殿様は蒼白になって藩邸
へ帰ってきた。すぐさま都甲太兵衛を召し寄せて、今晚
一晩でぜひとも庭を造ってくれ。よろしゅうございます。
太兵衛はハッキリとうけあつたものである。一晩数千の
人夫が出入りした。そして翌朝になると、一夜にして鬱蒼うっそう
たる森ができ上っていたのであつた。もつとも、この森
は三日ぐらいしか持たない森で、どの木にも根がついて
いなかったのだ。宮本武蔵の高弟はこういう才能をもつ
ていた。都甲家は今も熊本につづいているという話であ

る。

宮本武蔵に「十智」という書があつて、その中に「変」ということを説いているそうだ。つまり、智慧のある者は一から二へ変化する。ところが智慧のないものは、一は常に一だと思ひ込んでいるから、智者が一から二へ変化すると嘘だと言ひ、約束が違つたと言つて怒る。しかしながら場に応じて身を変え心を変えることは兵法のたいせつな極意なのだと言べているそうだ。

宮本武蔵は剣に生き、剣に死んだ男であつた。どうしたら人に勝てるか自分よりも修業をつみ、術においてま

さっているかもしれぬ相手に、どうしたら勝てるか、そのことばかり考えていた。

武蔵は都甲太兵衛の「いつ殺されてもいい」という覚悟を、これが剣法の極意でございますと、言っているけれども、しかし、武蔵自身の歩いた道は決してそれではなかったのである。彼はもっと凡夫の弱点のみ多く持った度しがたいほど鋭角の多い男であった。彼には、いつ死んでもいい、という覚悟がどうしても据すわらなかつたので、そこに彼の独自の剣法が発案された。つまり彼の剣法は凡人凡夫の剣法だ。覚悟定まらざる凡夫が敵に勝

つにはどうすべきか。それが彼の剣法だった。

松平出雲守は彼自身柳生流の使い手だったから、その家臣には武術の達人が多かったが、武蔵は出雲守の面前で家中随一の使い手と手合わせすることになった。

選ばれた相手は棒使いで、八尺余の八角棒を持って庭に現われて控えていた。武蔵が書院から木刀をぶらさげて降りてくると、相手は書院の降り口の横にただ控えて武蔵の降りてくるのを待っている。むろん、構えてはいないのである。

武蔵は相手に用意のないのを見ると、まだ階段を降り

きらぬうちに、いきなり相手の顔をついた。試合の挨拶も交わさぬうちに突いてくるとは無法な話だから、大いに怒って棒を取り直そうとするところを、武蔵は二刀でバタバタと敵の両腕を打ち、次に頭上から打ち下ろして倒してしまった。

武蔵の考えによれば、試合の場にながら用意を忘れていけるのがいけないのだと言うのである。何でも構わぬ。敵の隙につけこむのが剣術なのだ。敵に勝つのが剣術だ。勝つためには利用のできるものは何でも利用する。刀だけが武器ではない。心理でも油断でも、またどんな弱点

でも、利用し得るものをみんな利用して勝つというのが武蔵の編みだした剣術だった。

僕は先日、吉田精顕氏の「宮本武蔵の戦法」という文章を読んで、目の覚めるようなおもしろさを覚えた。吉田氏は武徳会の教師で氏自身二刀流の達人だということであるが、武術専門家の筆になった武蔵の試合ぶりというものははなはだ独特で、小説などで表わす以上に、光彩陸離たる個性を表わしているのである。以下、吉田氏の受け売りをして、すこしばかり武蔵の戦法をお話して

みたいと思う。ただ、僕流にゆがめてあるのは、これは僕の考えだから仕方がない。

武蔵が吉岡清十郎と試合したのは二十一の秋で、父の無二斎が吉岡憲法に勝っているので、父の武術にあきたらなかつた武蔵は、自分の剣法をためすために、まず父の勝つた吉岡に自分も勝たねばならなかつた。

武蔵は約束の場所へ時間におくれて出掛けて行つた。待ち疲れていた清十郎は武蔵を見るとただちに大刀の鞘さやを払つた。ところが武蔵は右手に木刀をぶらさげている。敵が刀を抜くのを見てもいっこうに立ち止まつて身構え

を直したりせず、今まで歩いてきた同じ速度と同じ構えで木刀をぶらさげたまま近づいてくるのである。試合の気配りがなくただ近づいてくるので清十郎はその不用意に呆れながら見ていると、武蔵の速度は意外に早くもう剣尖のとどく所まで来ていた。猶予すべきではないので、清十郎はいきなり打ちだそうとしたが、一瞬先に武蔵の木刀が上へ突きあげてきた。さては突きだと思って避けようとしたとき、武蔵は突かず、ふりかぶって一撃のもとに打ち下ろして倒してしまった。清十郎は死ななかつたが、不具者になった。

清十郎の弟、伝七郎が復讐ふくしゅうの試合を申し込んできた。

伝七郎は大力な男で兄以上の使い手だという話なのである。武蔵はまた約束の時間におくれて行った。今度の試合は復讐戦だから真剣勝負だろうと思って武蔵は木刀を持たずに行ったが、行ってみると驚いた。伝七郎は五尺何寸もある木刀を持っていて、遠方に武蔵の姿を見かけるともう身構えているのである。武蔵は瞬間ためらったがすぐ決心して刀を抜かず素手のまま今までどおりの足並で近づいて行った。伝七郎は油断なく身構えていたが、いつ真剣を抜くだろうかということを考えていたので気

がついた時には、五尺の木刀が長すぎるほど武蔵が近づいていたのである。そのとき刀を抜けば武蔵は打たれたかも知れぬが、突然とびかかって、伝七郎の木刀を奪い取った。そうして一撃の下に打ち殺してしまったのである。

吉岡の門弟百余名が清十郎の一子又七郎という子供をかこんで武蔵に果たし合いを申し込んだ。敵は多勢である。今度は約束の時間よりもはるかに早く出向いて木の陰に隠れていた。そこへ吉岡勢がやってきて、武蔵はまたおくれってくるだろうなどと噂うわさしているのが聞える。

武蔵は大小を抜いて両手に持っていきなり飛びだして又七郎の首をはね、切って逃げ、逃げながら切った。敵が全滅したとき、武蔵がふと気がつくど、袖そでに弓の矢が刺さっていたが、傷は一ヶ所も受けていなかった。

穴戸梅軒ししどばいけんというクサリ鎌がまの達人と試合をしたことがある。クサリ鎌というものはだいたいにおいて鎌の刃渡りが一尺三寸ぐらい。柄が一尺二寸ぐらい。この柄からクサリがつづいていて、クサリの先に分銅がつけてある。これを使う時には、左手に鎌を持ち、右手でクサリのほぼ中ほどを持ち、右手でクサリの分銅を廻転させる。講

談によると、分銅と鎌とで交互に攻撃してくるように言うけれども、これは不可能で、離れている間は分銅はいっ飛んでくるかわからぬが、鎌の方は接近するまで役に立たない。だから離れている時は、分銅にだけ注意すれば良いのである。また、クサリ鎌の特色の中で忘れてはならぬことはクサリの用法で、これを引っぱると棒になるから、これで大刀を受けたり摺^すりはずしたりできるのだそうだ。講談によると、クサリを太刀にまきつけたらもうしめたもので、クサリ鎌使いの方は落ち着いてジリジリ敵を引き寄せると言うけれども、そんな間抜け

なクサリ鎌使いはいないそうで、分銅のまきついた瞬間には鎌の方が斬りこんでいるものだそうだ。

穴戸梅軒は武蔵を見ると分銅を廻転させはじめた。武蔵は五、六十歩離れて右手に大刀をぬいてぶらさげたまましばらく分銅の廻転を見ていたが、右手の大刀を左手に持ち変えた。それから右手に小刀を抜いた。武蔵は左ギツチョではないから（肖像を見るとわかる）本来だったら右手に大刀、左手は小刀のはずだけれどもこの時は逆になっていることを注意していただきたい。さて武蔵は左右両手ともに上段にふりかぶったのである。そうし

て、右手の小刀を敵の分銅の廻転に合わせて同じ速度で廻しはじめた。こうして廻転の調子を合わせながらジリジリと歩み寄って行った。

梅軒は驚いた。分銅で武蔵の顔面を打つには同じ速度で廻転している小刀が邪魔になる。邪魔の小刀に分銅をまきつけければ、左の大刀が怖い。やむなくジリジリ後退すると武蔵はジリジリ追ってくる。と、クサリが下へ廻った瞬間に、武蔵の小刀が手を離れて梅軒の胸へとんできた。慌てて廻転をみだした時には左手の大刀が延びて梅軒の胸を突きさしていた。梅軒は危く身をそらした

が次の瞬間には頭上から一刀のもとに斬り伏せられていたのである。この試合には梅軒の弟子が立ち合っていたが、先生斬らるといっているので騒ぎかけたとき、武蔵はすでに両刀を持ち直して弟子の中へ斬りこんでいたのであった。

剣法には固定した型というものはない、というのが武蔵の考えであった。相手に応じて常に変化するというのが武蔵の考えで、だから武蔵は型にとらわれた柳生流を非難していた。柳生流には大小六十二種の太刀数があった、変に応じたあらゆる太刀をあらかじめ学ばせようと

いうのだが、武蔵はこれを否定して、変化は無限だからいくら型を覚えても駄目で、あらゆる変化に応じ得る根幹だけがだいじだと言って、その形式主義を非難したのである。

これとほぼ同じ見解の相違が、佐々木小次郎と武蔵の間にも見る事ができる。

小次郎は元来富田勢源の高弟で、勢源門下に及ぶ者がなくなり、勢源の弟の次郎左衛門にも勝ったので、大いに自信を得て「巖流^{がんりゅう}」という一派をひらいた男である。元々富田流は剣の速捷^{そくしやう}を尊ぶ流派だから、小次郎もま

た速技を愛する剣法だった。彼は橋の下をくぐる燕つばめを斬って速技を会得したというが、小次郎の見解によれば、要するに燕を斬るには初太刀をかわして燕が身をひるがえす時、その身をひるがえす速力よりも早い速力で斬ればいいという相対的な速力に関する考えだった。

ところが武蔵によれば、相対的な速力それ自身には限度がある。つまり変化に応じてあらかじめ型をつくることと同じで、燕の速力に応じる速力を用意しても燕以上の速力のものには用をなさぬ。だから、いちばんたいせつなのは敵の速力に対するこちらの観察力で、いかなる

速力にも応じ得る眼をつくるのが肝腎かんじんだという考えだった。

小次郎は燕から会得した速剣を「虎切剣」と名づけて諸国を試合して廻り一度も負けたことがなく、小倉の細川家に迎えられて、剣名大いに高かった。そのころ京都にいた武蔵は小次郎の隆隆たる剣名を耳にして、その速剣と試合してみたいと思ったのだ。速剣それ自身は剣法の本義でないという彼の见解から、当然のことであつた。彼は小倉へ下つて細川家へ試合を願い出で、許されて、船島で試合を行なうことになつた。武蔵は家老の長岡佐

渡の家に泊まることになり、翌朝舟で船島へ送られるはずであったが、彼自身の考えがあつて、ひそかに行方ゆくえをくらし、下関の廻船問屋小林太郎左衛門の家へ泊まつた。

翌日になつて、もう小次郎が船島へついたという知らせが来たとき、ようやく彼は寢床から起きた。それから食事をすませ、主人を呼んで櫓ろをもらい受けて、大工道具を借り受け、木刀を作りはじめた。何べんも渡航を催促する飛脚が来たが、彼は耳をかさず丹念に木刀をきざんだ。四尺一寸八分の木刀を作つたのである。

元来、小次郎は三尺余寸の「物干竿」ものほしざおとよばれた大剣を使い、それがはなはだ有名であつた。武蔵も三尺八分の例外的な大刀を帯びてはいたが、物干竿の長さには及ばぬ。のみならず小次郎は速剣で、この長い剣を振り下ろすと同時に返し打つ。この返しが小次郎独特の虎切剣であつた。これに応ずるには、虎切剣のとどかぬところから、片手打ちに手を延ばして打つ、これが武蔵の戦法で、特殊な木刀を作つたのもそのためだつた。

武蔵は三時間おくれて船島へついた。遠浅だつたので武蔵は水中へ降りた。小次郎は待ち疲れて大いにいらだ

っており、武蔵の降りるのを見ると憤然波打ち際まで走ってきた。

「時間に遅れるとは何事だ。気おくれがしたのか」

小次郎は怒鳴ったが、武蔵は答えない。黙って小次郎の顔を見ている。武蔵の予期のとおり小次郎ますます怒った。大剣を抜き払うと同時に鞘を海中に投げすてて構えた。

「小次郎の負けだ」と武蔵が静かに言った。

「なぜ、俺の負けだ」

「勝つつもりなら、鞘を水中へ捨てるはずはなかろう」

この間答は武蔵一生の圧巻だと僕は思う。武蔵はとにかく一個の天才だと僕は思わずにいられない。ただ彼は努力型の天才だ。堂々と独自の剣法を築いてきたが、それはまさに彼の個性があつて初めて成り立つ剣法であつた。彼の剣法は常に敵に応じる「変」の剣法であるが、この最後の場へ来て、鞘を海中へ投げすてた敵の行為を反射的に利用し得たのは、彼の冷静とか修練というものもあるかも知れぬが、元来がそういう男であつたのだ、と僕は思う。特に冷静というのではなく、ドタン場に於いても藁わらをつかむ男で、その個性を生かして大成したの

が彼の剣法であつたのだ。溺れる時にも藁をつかんで生きようとする、トコトンまで足場足場にあるものを手当たりしだい利用して最後の活へこぎつけようとする、これが彼の本来の個性であると同時に、彼の剣法なのである。個性を生かし、個性の上へ築き上げたという点で、彼の剣法はいわば彼の芸術品と同じようなものだ。彼は絵や彫刻が巧みで、絵の道も剣の道も同じだと言っているが、しごく当然だと僕は思うのである。

僕は船島のこの問答を、武蔵という男の作った非常にきわどいがしかしそれゆえ見事な芸術品だと思つてい

る。

実際試合は危なかった。間一髪のところまで勝ったのである。

小次郎は激怒して大刀をふりかぶった。問答に対する答えとしての激怒をこめて振りかぶった刀なのだ。この機会を逃してならぬことを武蔵は心得ていた。なぜなら、小次郎に時間を許せば、彼も手練の剣客だから、振りかぶった剣形の中から冷静をとりもどしてくるからである。

武蔵は急速に近づいて行った。大胆なほど間をつめた。

小次郎は斬り下ろした。だが、小次郎の速剣は初太刀よりもその返しがさらに怖い。もとより武蔵は前進をとめることを忘れてはいない。間一髪のところ、剣尖をそらして、前進中に振り上げた木刀を片手打ちに延ばして打ち下ろした。小次郎は倒れたが、同時に武蔵の鉢巻はちまきが二つに切れて下へ落ちた。

小次郎は倒れたが、まだ生気があった。武蔵が誘って近づくと果たして大刀を横に斬り払ったが、武蔵は用意していたので巧みに退きはかま袴の裾を三寸ほど切られただけであった。しかしその瞬間木刀を打ち下ろして小次郎

の胸に一撃を加えていた。小次郎の口と鼻から血が流れて、彼は即死をとげてしまった。

武蔵は都甲太兵衛の「いつ殺されてもいい」覚悟を剣法の極意だと言っているが、彼自身の剣法はそういう悟道の上へ築かれたものではなかった。晩年の著「五輪書」がつまらないのも、このギャップがあるからで、彼の剣法は悟道の上にはなく、個性の上にあるのに、悟道的な統一で剣法を論じているからである。

武蔵の剣法というものは、敵の気おくれを利用するば

かりでなく、自分自身の気おくれまで利用して、逆にこれを武器に用いる剣法である。溺れる者藁もつかむ、というさもしい弱点を逆に武器にまで高めて、これを利用して勝つ剣法なのだ。

これがほんとうの剣術だと僕は思う。なぜなら、負ければ自分が死ぬからだ。どうしても勝たねばならぬ。妥協の余地がないのである。こういう最後の場では、勝つて生きる者に全部のものがあつたのだから、是が非でも勝つことだ。どうしても勝たねばならぬ。

ところがはなはだ気の毒なことには、武蔵の剣法は当

時の社会には容れられなかった。形式主義の柳生流が全盛で、武蔵のような勝負第一主義は激しすぎて通用の余地がなかったのだ。

武蔵の剣法もまた、いわば一つの淪落りんらくの世界だと僕は思う。世に容れられなかったから淪落の世界だと言うのではないが、しかし、世に容れられなかった理由の一つは、たしかにその淪落の性格のためだとは言えるであろう。

一か八かであるが、しかも額面どおりではなく、実力をはみだしたところで勝敗を決し、最後の活を得ようと

する。伝七郎との試合では相手が大きな木刀を持参したのに驚いた時に、逆にそれを利用して素手で近づくといい方法をあみだしている。小次郎の試合では、相手が鞘を投げすてるのを逃さなかったし、松平出雲守の御前試合では相手の油断に目をとめると挨拶の前に相手を打ち倒してしまった。

武蔵は試合に先立って常に細心の用意をしている。時間をおくらせて、じらしたり、逆をついて先廻りしたり、試合に当たって心理的なイニシアチヴをとることを常に忘れることがなく、自分の木刀を自分でけずるといふよ

うな堅実な心構えも失わないし、クサリ鎌に応じては二刀をふりかぶるといふ特殊な用意も怠らない。試合に当たって常に綿密な計算を立てていながら、しかし、いよいよ試合にのぞむと、さらに計算をはみだしたところに最後の活をもとめているのだ。このような即興性というものはいかほど深い意味があってもオルソドックスには成り得ぬもので、一つごとに一つの奇蹟を賭けている。自分の理念を離れた場所へ自分を突き放して、そこで賭け事をしているのである。その賭け事には万全の用意があり、また、自信があつたのかも知れぬが、しかし、賭

け事であることには変わりがない。

「小次郎の負けだ」

めざとくも利用して武蔵はそう言ったが、しかし、そこに余裕などがあるものか。武蔵はただ必死であり、必死の凝った一念が、溺れる者の激しさで藁の奇蹟を追うているだけの話だ。余裕というもののいつさいない無意識の中の白熱の術策だから、凄まじいほど美しいと僕は言う。万全の計算をつくし、一生の修業を賭けた上で、なお、計算や修業をはみだしてしまふ必死の術策だから美しい。彼はどうしても死にたくなかった。是が非でも

生きたかった。その執着の一念が悪相の限りを凝らして彼の剣に凝っており、縋り得るあらゆる物に縋りついて血路をひらこうとしているだけだ。最後の場にのぞんだ時に、意識せずしてこの術策を弄ろうしてしまふ武蔵であつた。救われがたい未練千万な性格を、逆に武器に駆り立てて利用している武蔵であつた。

しかしながら、武蔵には、いわば悪党の凄味すごみというものがないのである、松平出雲の面前で相手の油断を認めると挨拶前に打ち倒してしまつたりして、卑怯といえは卑怯だが、しかし悪党の凄味ではなく、むしろ、ボンク

ラな田舎者いなかの一念凝らした馬鹿正直というようなものだ。彼はとにかく馬鹿正直に一念凝らして勝つことばかり狙ねらっていた。所詮は一個の剣術使いで、一王国の主たるべき悪党ぶりには縁がなかった。

いつでも死ぬる、という偉丈夫の覚悟が彼にはなかったのだ。その覚悟がなかったために編みだすことのできた独特無比の剣法ではあったけれども、それゆえまた、剣を棄てて他に道をひらくだけの芸がなく、生活の振幅がなかった。都甲太兵衛は家老になって、一夜に庭をつくる放れ業を演じているが、武蔵は二十八で試合をやめ

て花々しい青春の幕をとじた後でも、一生碌々ろくろくたる剣術
使いで、自分の編みだした剣法が世に容れられぬことを
憤るだけのことにすぎない。六十の時「五輪書」を書い
たけれども、個性の上に不拔な術を築きあげた天才剣の
光輝はすでになく、率直に自己の剣を説くだけの自信と
力がなく、いたずらに極意書風のもったいぶった言辞を
弄して、地水火風空の物々しい五卷に分けたり、深遠を銜てら
って俗に墮し、ボンクラの本性を暴露しているに過ぎな
いのである。

剣術は所詮「青春」のものだ。特に武蔵の剣術は青春そのものの剣術であつた。一か八かの絶対面で賭博してゐる淪落の術であり、奇蹟の術であつたのだ。武蔵自身がそのことに気づかず、オルソドックスを信じていたのが間違いのもとで、元来世に容れられざる性格をもつていたのである。

武蔵は二十八の年に試合をやめた。その時まで試合うこと六十余度、一度も負けたことがなかつたのだが、この激しさを一生涯持続することができたら、まさに驚嘆すべき超人と言わざるを得ぬ。けれども、それを要求す

るのはあまりに苛酷なことであり、血気にはやり名誉に燃える彼とはいえ、その一々の試合の薄氷を踏むがごとく、細心周到万全を期したが上にも全霊をあげた必死の一念を見れば、僕もまた思うて慄然りっぜんたらざるを得ず、同情の涙を禁じ得ないものがある。しかしながら、どうせここまでやりかけたなら、一生涯やり通してくれれば良かったに。そのうちに誰かに負けて、殺されてしまっても仕方がない。そうすれば彼も救われたし、それ以外に救われようのない武蔵であったように僕は思う。鋭気衰えて「五輪書」などは下の下である。

まったくもって、剣術というものを、いちばん剣術本来の面目の上に確立していながら、あまりにも剣術の本来の精神を生かしすぎるがゆえにかえって世に容れられず、またみずからはその真相を悟り得ずに不満の一生を終わった武蔵という人は、悲劇的な人でもあるし、戯画的な滑稽こっけいさを感じさせる人でもある。彼は世の大人たちに負けてしまった。柳生派の大人たちに負け、もつとつまらぬ武芸のあらゆる大人たちに負けてしまった。彼自身が大人になろうとしなければ、負けることはなかったのだ。

武蔵は柳生兵庫のもとに長く滞在していたことがあったという。兵庫は柳生派随一の使い手と言われた人だ。そうで、兵庫は武蔵を高く評価していたし、武蔵もまた兵庫を高く評価していた。二人は毎日酒をくんだり碁を打ったりして談笑し、結局試合をせずには別れてしまった。心法に甲乙なきことをおのおの認め合っていたので試合までには及ばなかったのだという話で、なるほどあり得ることだとうなづけることではあるが、しかし僕は武蔵のためにはなはだこれをとらないものだ。試合をしなければ武蔵の負けだ。試合の中にだけしか武蔵の剣はあり

得ず、また、試合をほかに武蔵という男もあり得ない。試合は武蔵にとっては彼の創作の芸術品で、試合がなければ彼自身が存在していないのだ。談笑の中に敵の心法の甲乙なきを見て笑って別れるような一人前らしい生き方を覚えては、もう武蔵という作品は死滅してしまったのだ。

何事も勝負に生き、勝負に徹するということは辛いものだ。僕は時々日本棋院きいんの大手合わせを見物するが、手合わせが終わると、必ず今の盤面を並べ直して、この時にこう、あの時にはあの方がというような感想を述べて

研究し合うものである。ところが、勝った方は談論風発、感想を述べては石を並べその楽しそうなありさまお話にならないのに、負けた方ときたら石のように沈んでしまつて、まさに永遠の恨みを結ぶかのごとく、釈然としな
いことはなはだしい。僕でも碁を打って負けた時には口惜しいけれども、その道の商売人の恨みきつた形相はぎようそう
質的に比較にならないものがある。いのちを籠こめた勝負だから当然の話だけれども、負けた人のいつまでも釈然とし
ない顔付きというものは、眺めて決して悪い感じのものではない。
中途半端なところが無いからである。テ

レ隠しに笑うような、そんなところが全然ないのだ。

将棋の木村名人は不世出の名人と言われ、生きながらにしてこういう評価を持つことはおよそあらゆる芸界においてきわめてまれなことであるが、全く彼は心身あげて盤上にのたくり廻るといふ毒々しいまでに驚くべき闘志をもった男である。碁打の方には、この闘志の片鱗だに比肩すべき人がない。相撲取にも全然おらぬ。

けれども、木村名人も、もう何度負けたか知れないのだ。これに比べれば武蔵の道は陰惨だ。負けた時には命がない。佐々木小次郎は一生に一度負けて命を失い、武

蔵はともかく負けずに済んで、畳の上で往生を遂げたが、全く命に関係のない碁打ちや将棋指しですら五十ぐらいの齢になると勝負の激しさに堪えられないなどと言いだすのが普通だから、武蔵の剣を一貫させるということはまさに尋常一様のことではなかった。僕がそれを望むことは無理難題には相違ないが、しかしながら武蔵が試合をやめた時には、武蔵は死んでしまったのだ。武蔵の剣は負けたのである。

勝つのが全然嬉しくもなくおもしろくもなく何の張り合いにもならなくなってしまうとか、生きることにも

ウンザリしてしまったとか、何か、こう魔にみいられたような空虚を知って試合をやめてしまったというわけでもない。それは「五輪書」という平凡な本を読んでみればわかることだ。ただ、だらだらと生きのびて「五輪書」を書き、その本のおかげをもって今日もなおその盛名を伝えているというわけだが、しかし、このような盛名が果して何物であろうか。

四 再びわが青春

淪落の青春などと言って、まるで僕の青春という意味はヤケとかデカダンという意味のように思われるかも知れないけれども、そういうものを指しているわけでは毛頭ない。

そうかと言って、僕自身の生活に何かハッキリした青春の自覚とか讃歌というものが有るわけでもないことは先刻白状に及んだとおりで、僕なんかは、一生ただ暗夜

をさまよっているようなものだ。けれども、こういうさまよいの中にも、僕には僕なりの一条の燈の目当てぐらいはあるもので、ぼうぼうく 茫漠たる中にも、なにか手探りして探すものはあるのである。

非常に当然な話だけれども、信念というようなものがなくて生きているのは、あんまり意味のないことである。けれども、信念というものは、そう軽々に持ちうるものではなくて、お前の信念は何だ、などと言われると、僕などまっさきに返答ができなくなってしまうのである。それに、信念などというものがなくとも人は生きている

ことに不自由はしないし、結構幸福だ、ということになってくると、信念などというものは単に愚か者のオモチヤであるかもしれぬのだ。

実際、信念というものは、死することによって初めて生きることができるような、常に死と結ぶ直線の上を貫いていて、これもまたひとつの淪落であり、青春そのものにほかならないと言えるであろう。

けれども、盲目的な信念というものは、それがいかほど激しく生と死を一貫して貫いても、さまで立派だと言えないし、かえって、そのヒステリイ的な過剰な情熱に

濁りを感じ、不快を覚えるものである。

僕は天草四郎という日本における空前の少年選手が大好きで、この少年の大きな野心とその見事な構成について、もう三年越し小説に書こうと努めている。そのため、切支丹キリシタンの文献をかなり読まねばならなかったけれども、熱狂的な信仰をもって次から次へ堂々と死んで行った日本のおびただしい殉教者たちが、しかし、僕は時に無益なヒステリイ的な饒舌じょうぜつのみを感じ、不快を覚えることがあるのであった。

切支丹は自殺をしてはいけないという戒めがあつて、

当時こういう戒めははなはだ厳格に実行され、ドン・ア
ゴスチノ小西行長は自害せず刑場に引き立てられて武士
らしからぬ死を選んだ。また、切支丹は武器をとって抵
抗しては殉教と認められない定めがあつて、そのために
島原の乱の三万七千の戦死者は殉教者とは認められてい
ないのだが、この掟おきてによつて、切支丹らしい捕われ方
をするために、捕吏に取り囲まれたとき、わざわざ腰の
刀を鞘さやぐるみ抜きとつて遠方へ投げすてて縄なわを受けたな
どという御念の入つた武士もあつたし、そうかと思つと、
主のために殉教し得る光栄を与えてもらえたと言つて、

首斬りの役人に感謝の辞と祈りをささげて死んだバテレ
ンがあつたりした。当時は殉教の心得に関する印刷物が
配布されていて、信徒たちはみんな切支丹の死に方とい
うものを勉強していたらしく、全くもって当時教会の指
導者たちというものは、あたかも刑死を奨励するかのよ
うな驚くべきヒステリーにおちいつていたのである。無
数の彼らの流血は凄惨眼を掩おおわしめるものがあるけれど
も、人々を単に死に急がせるかのようなヒステリーの性
格には時に大いなる怒りを感じ、その愚かさに齒がみを
覚えぬにいらぬ時もあったのだ。

いのちにだつて取り引きというものがあるはずだ。いのちの代償が計算はずれの安値では信念に死んでも馬鹿な話で、人々は十銭の茄子なすを値切るのにヒステリイは起こさないのに、いのちの取り引きに限ってヒステリイを起こしてわけもなく破産を急ぐというのは決して立派なことではない。

宮本武蔵は吉岡一門百余名を相手に血闘の朝、一乗寺下り松の果たし場へ先廻りして急ぐ途中、たまたま八幡様の前を通りかかって、ふと、必勝を祈願せずにいられ

ない気持ちになり、まさに神前に額ぬかずこうとして、思いとどまった。自力で勝ち抜かねばならないという勇猛心を駆り起こしたのである。

僕はこの武蔵を非常にいとしいと思うけれども、これはただこれだけの話で、この出来事を彼の一生に結びつけて大きな意味をもたせることには同感しない。武蔵のみではないのだ。いかなる神の前であれ、神の前に立つたとき何人が晏如あんじよたり得ようか。神域とかお寺の境内というものは閑静だから、僕は時々そこを選んで散歩に行くが、一片の信仰もない僕だけれども、本殿とか本堂の

前というものは、いつによらず心を騒がせられるものである。祈願せずにいらぬような切ない思いを駆り立てられる。さればといつて本当に額ずくだけのひたむきな思いにもなりきれないけれども、こんなに煮えきららないのは怪しからぬことだから、今度から思いきって額ずくことにしようと思つて、ある日決心して氏神様へでかけて行つた。いよいよとなつてお辞儀だけは済ましたけれども、同時に突然僕の身体に起こつたギコチのなさにビツクリして、やっぱり僕のような奴は、心にどんな切ない祈願の思いが起こつても、それはただ心の綾あやなのだか

ら実際に頭を下げたりしてはいけけないのだと諦めた。

自殺した牧野信一はハイカラな人で、人の前で泥くさい自分をさらけだすことを最も怖れ慎んでいた人だったのに、神前や仏前というところ、どうしても素通りのできないう人で、この時ばかりは誰の目もはばからず、必ずお賽銭さいせんをあげて丁寧に拝む人であった。その素直さが非常に羨ましいと思っただけけれども、僕はどうしてもいつしよに並んで拝む勇気が起こらず、離れた場所で鳩の豆を蹴けとばしたりしていた。

数年前、菱山修三が外国へ出帆する一週間ぐらい前に

階段から落ちて咯血し、生存を絶望とされたことがあった。僕も、もう、菱山は死ぬものとはばかり思っていたのに、一年半ぐらいで恢復してしまった。菱山の話によると、肺病というものは、病気を治すことを人生の目的とする覚悟ができさえすれば必ず治るものだ、と言うのであった。他の人生の目的をいっさい断念して、病気を治すことだけを人生の目的とするのである。そうして、絶対安静を守るのだそうだ。

その後、僕が小田原の松林の中に住むようになったら、近所合壁みんな肺病患者で、悲しいかな、彼らの大部分

の人たちは他のいつさいを放擲して治病をもつて人生の目的とする覚悟がなく、何かしら普通人の生活がぬけきれなくて中途半端な闘病生活をしていることがすぐわかった。菱山よりもはるかに軽症と思われた人たちが、読書に耽ったり散歩に出歩いたりしているうちにたちまちバタバタ死んで行った。治病をもつて人生の目的とするというのも相当の大事業で、肺病を治すには、かなり高度の教養を必要とするということをさとらざるを得なかった。

死ぬることは簡単だが、生きることは難事業である。

僕のような空虚な生活を送り、一時間一時間に実のない生活を送っていても、この感慨は痛烈に身にさしせまって感じられる。こんなに空虚な実のない生活をしていながら、それでいて生きているのが精いっぱい、祈りもしたい、酔いもしたい、忘れもしたい、叫びもしたい、走りもしたい。僕には余裕がないのである。生きることが、ただ、全部なのだ。

そういう僕にとっては、青春ということとは、要するに、生きることのシノニムで、年齢もなければ、また、終わりというものもなさそうである。

僕が小説を書くのも、また、何か自分以上の奇蹟を行わずにはいられなくなるためで、全くそれ以外にはたいした動機がないのである。人に笑われるかも知れないけれども、実際そのとおりなのだから仕方がない。いわば、僕の小説それ自身、僕の淪落のシムボルで、僕は自分の現実をそのまま奇蹟に合一せしめるということを、唯一の情熱とする以外にほかの生き方を知らなくなってしまうのだ。

これははなはだ自信たっぷりのようにでいて、実はこれぐらい自信の欠けた生き方もなかろう。常に奇蹟を追い

もとめるといふことは、気がつくたびに落胆するといふことの裏と表で、自分の実際の力量をハッキリ知るといふことぐらい悲しむべきことではないのだ。

だがしかし、持って生まれた力量というものは、いまさら悔いても及ぶはずのものではないから、僕に許された道というのは、とにかく前進するだけだ。

僕の友達に長島萃という男があつて、八年前に発狂して死んでしまったけれども、この男の父親は長島隆二という往昔名高い陰謀政治家であつた。この政治家は子供に向かつて、まともな仕事をするな、山師になれ、とい

うことを常々説いていたそうで、株屋か小説家になれと言ったそうだ。

この話をそのころ僕の好きだった女の人に話したら、その人はキツと顔をあげて、小説家は山師ですか、と言った。

その当時は僕も閉口して、イエ、小説家は山師の仕事ではありません、と言ったかも知れないが（よく覚えていないのだ）、今になって考えると、さすがに陰謀政治家は巧うまいことを言ったものだ。もっとも彼は山師の意味を僕とは違ったふうに使っているのかもしれないが、僕

は全く小説は山師の仕事だと考えている。金が出るか、ニツケルが出るか、ただの山だか、掘り当ててみるまでは見当がつかなくて、とにかく自分の力量以上を賭けていることが確かなのだから。もっと普通の意味においても小説家はやっぱり山師だと僕は考えている。山師でなければ賭博師だ。すくなくとも僕に関する限りは。

こういう僕にとっては、所詮一生が毒々しい青春であるのはやむを得ぬ。僕はそれにヒケ目を感じることもなきにしもあらずという自信のないありさまを白状せずにもいられないが、時には誇りを持つこともあるのだ。そう

して「淪落に殉ず」というような一行を墓に刻んで、サヨナラだという魂胆をもっている。

要するに、生きることが全部だというよりほかに仕方がない。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館